3．　父なる神について

はじめに神が天と地を創造された。

旧約聖書　創世記　1章1節

父なる神について学びます。

父なる神についてここで学ぶことは、①神が世界を造られた（創造）、②神が世界を支配しておられる（摂理）という二点です。

キリスト教は十字架から始まるのではなく、創造から始まります。創造があって堕落があり、キリストによる回復と完成があります。その完成は「創造の完成」つまり「破壊された創造の完成」となります。

①創世記1章1節には「はじめに神が天と地を創造された」とあります。「天と地」は「すべてのもの」を意味します。すべては神が造りました。同志社大学を創立した新島襄は、二十歳の時にこれを読んで衝撃を受け、アメリカに密航します。

「私はその本を置き、あたりを見回して、心の中でこう言った。『神が天地を創造された。誰が私を造ったのか。両親か？いや神である。そうであるなら、私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直でなくてはならない。私はもはや両親のものではない。神のものだ。』この瞬間、父の家に私を固く縛り付けてきた強い絆はバラバラに断ち切られた。その時、私は自分自身の道を進まなければならないと感じた。私は、地上の両親よりも、『天の父』に仕えなければならない。」

新島が衝撃を受けたのは、天地を造られた神という存在がある、ということでした。彼が教えられてきた伝統的な神道や仏教の神仏は「天と地」を超えるものではありません。それは私たち人間の延長線上にあるもので、「天と地」の中にあります。それに儒教では「親への孝行」と「忠君愛国」は絶対です。一方、聖書の神はこれらすべてを超えています。つまり、親と国と「天地」を完全に超越し、これらの枠の外におられます。そもそも「天地」ができる前から永遠に生きていて、「天地」を造られたというのですから、これ以上に大きな方は考えられません。神道の神、仏教の仏、江戸幕府、海外の列強、親、これらすべてをはるかに超えて絶対の存在です。そんな方がいたのかというのが新島の驚きで、いるならそれを知らなきゃ自分の人生は始まらないというのが、当時の幕府の掟を破っていのちがけで密航した動機でした。

このように、神はすべてのものを造りました。何も無いところから、無から、すべてを造ります。ただ「光よ、あれ」とのみことばですべてのものを造ります。神がすべてのものを造ら

れたのですから、すべてのものは神のものです。神のものでないものは、この世に一つもありません。「私は神のものだ」と新島が言ったように、私の人生は神のものです。

②父なる神について私たちが知るべき二つ目のことは、父なる神が世界を支配しておられるということです。すべてを造られた神は、すべてを支配し、すべてを審判して、世界の歴史を終わらせます。この世で起こるすべての事を一手に治めています。この方の許しなくして、雀一羽さえ地に落ちることはありません。どんなに小さないのちでも、その全能の御手で支えておられるからです。森羅万象はその御手の中にあります。この方が「成る」と言えば成るし、「成らぬ」と言うなら人間がどんなに頑張っても成りません。すべてはこの方次第です。事は「人の願いや努力によるのではなく、憐れんでくださる神による」のです（ローマ人への手紙９章１６節）。天下で起こる一切は、すべてこの方と直接つながっています。生きるも死ぬも、この方次第です。私たちの何もかも、すべてのことは、この方と直接関係しているのです。

私たちは、自分のことを、自分との関係、他人との関係、社会との関係、自然の要因などで考えます。例えば、病気が治ったのは、自分が健康に気をつけて、健康に良いものを食べ、適度に運動し、医者からもらって薬が効いたから、などと考えます。逆にうまくいかない場合、例えば、仕事で失敗したのは、職場のあいつが悪いとか、会社のせいだ、運が無かった、この悪い社会のせいだ、などと考えます。目に見える横の関係でいつも考えるのです。でも、どんなに健康に気をつけても早死にする人もいるし、どんなに不養生でも長生きする人もいます。

努力しても失敗する人もいるし、努力しなくてもうまくいく人もいます。すべてのことが最終的には神と関わっているからです。神がすべてを支配しています。神が私たちの健康のことも仕事のことも治めています。それも直接支配しています。みことばをもって治めているのです。

結局、今、私たちがこうして死なずに生きているのは、この世のあらゆる現象を超えて、神が「生きろ」と命じているからです。心臓に「動け、動け」と命じています。それで、神がそう命じる間は生きているのですが、「止まれ」と命じると心臓が止まって息絶えます。つまり、みことばをもって天地を造られた神は、造ってそれで終わりというのではなくて、その後もみことばをもって私たちの歴史の中で創造的に働いておられるのです。これを「摂理」と言います。「昨日があって今日があり、今日があって明日につながる」というように、世界の歴史は、天地創造以来、水平的に流れて展開しているように見えるのですが、実際にはそうではありません。昨日があって今日があっても、明日は来ないかもしれないからです。世界の歴史は、これを治める神と直接関わりながら、垂直的に展開しています。神が、みことばをもって、その瞬間その瞬間、一つ一つ、創造的に働きながら世界の歴史は進んで行きます。これが聖書の世界観であり歴史観です。

それで、葦の海が目の前で真っ二つに分かれるという現象も起こります。３８年間寝たきりだった人が、イエスさまの一声でいきなり元気に立ち上がるということも起こるのです。こうした現象は、この世では「奇跡」と呼ばれます。でも、神がすべてを造って支配していること

を信じる者にとっては、これは当たり前に聖書的な歴史観であり世界観です。つまり、このように生きて働いておられるのが、聖書の教える神なのです。もしどうしても「奇跡」ということばを使いたいならば、病気の癒やしや超常現象のみならず、神が世界をすばらしく造られたこと、天地万物を動かしておられること、限りない憐れみをもってこの私を生かしてくださっていること、こうした神の「創造」と「摂理」こそが「奇跡」です。

それでは、最後に、神の創造と摂理を信じる私たちはどう生きたら良いのか、以下の三つを確認しましょう。

まず、①世界を最終的に支配するのは神なのですから、神を畏れなければなりません。世界は私のものではなく、自分の人生も自分のものではありません。神のものです。新島襄のように、神を知り、神を畏れて、神に従いましょう。

②神が世界の究極の支配者である事実は、希望でもあります。世界がどんなに悪くても、最後は神が世の悪を一掃し、初めの創造を完成させます。どんなに困難でも、あらゆる妨害を打ち破り、「すべてが良かった」世界を回復なさいます。

③すべてのさばきと結果は主に委ねて、平安に、自分のなすべきつとめを果たしましょう。ヨセフは兄たちに奴隷として売られるも、「あなたがたは私に悪を謀ったが、神はそれを良いことのための計らいとしてくださった」と彼らを赦します。それを通して、一族と、さらには「多くの人が生かされる」神の大きな計画をそこに見たからでした（創世記５０章２０節）。